

連載○ヴィジニアル

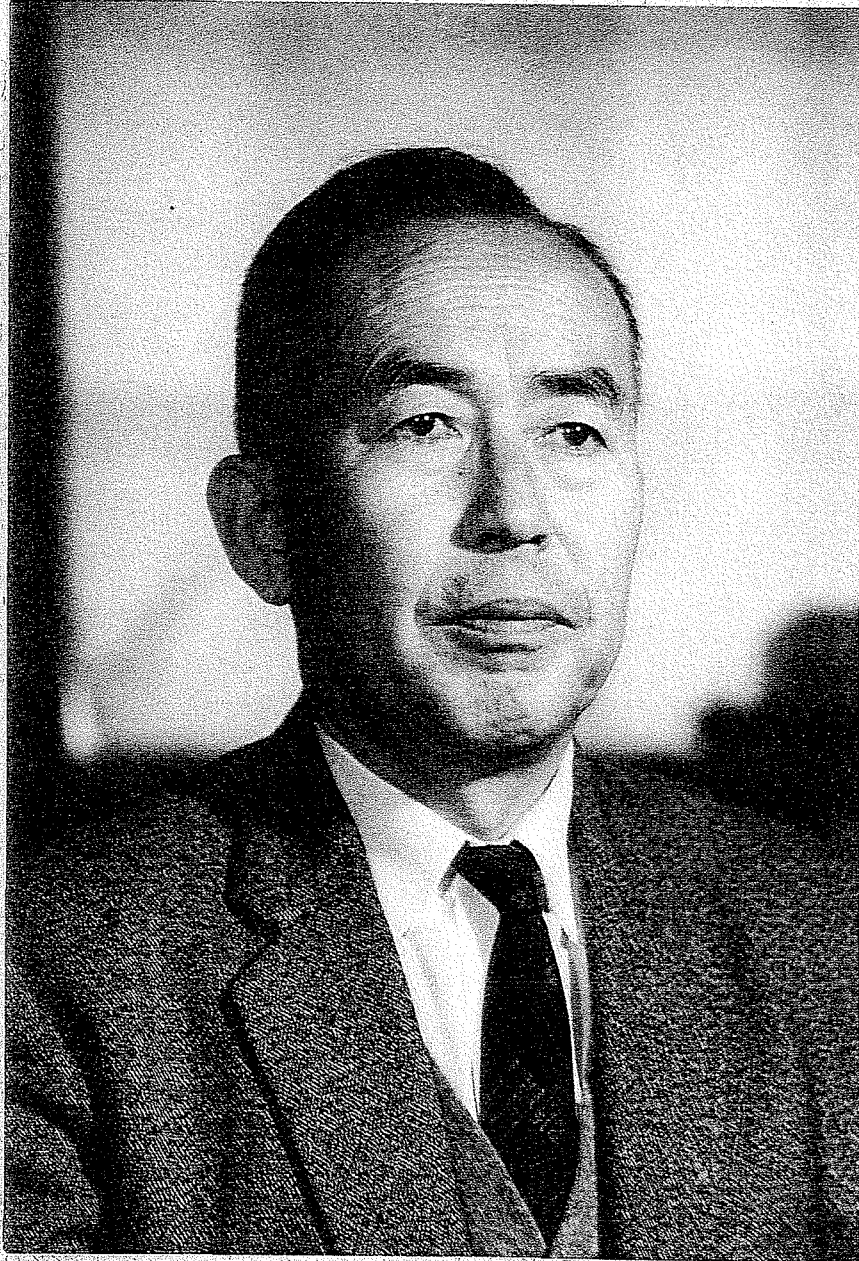
【生物学者小伝】⑫

海藻研究ひとすじ

山田 幸男 先生

文○山田家正(小樽商科大学名誉教授)

※出典を記していない写真は、山田幸男著「わが海藻研究五十年」より転載



Y. Yamada

還暦記念論文集掲載の山田幸男先生とサイン(1962年10月 北大理学部植物学教室作成)



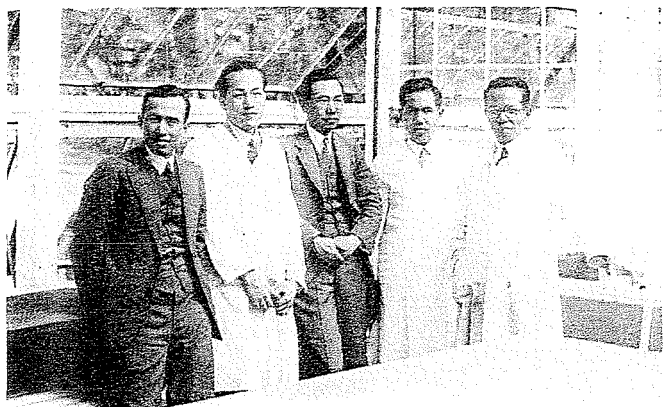
パリ・リュクサンブール宮殿前の理学部教授候補者たち(1929年、いわゆる「パリ会議」の時の写真、後列左端が山田、その右一人おいて中谷宇吉郎、茅誠司、前列中央が田所哲太郎、その左 杉野目晴貞、「写真集 北大百年 1876-1976より」)

藻類学の拠点を北大に 宮部金吾の願い

1930(昭和5)年、当時の北大には農、工、医の三学部があったが、新たに理学部が設置されることになった。1927年に創立委員会ができ、建物の設計と教授候補者の選定に着手した。1929年に完成した理学部本館(現在の北大総合博物館)は札幌で初めての近代的なコンクリート造りで、水洗トイレを見に来る市民が多かったという。教授候補者として全国から気鋭の若手研究者が選ばれた。着任に先立ち1928年に彼らは2年間の欧米留学を命ぜられ、研鑽を積んだ。教授候補者たちによるパリでの会議は理学部最初の教授会と言われた。「写真集 北大百年 1876-1976」には「パリ・リュクサンブール宮殿前の理学部教授候補者たち(昭和4年)」という写真が掲載されている。そこには、山田幸男を含め、後に北大理学部の名を高めた物理の中谷宇吉郎(氷雪の研究)、茅誠司(後に東大学長)、化学の杉野目晴貞(後に北大学長)らの若い頃の姿が見える。

山田幸男は植物学第二講座(植物分類学)担当助教授として1930年4月に着任し翌年、31歳の若さで教授に昇任した。その山田を北大に連れてきたのは理学部創設委員の一人で、当時の植物学界の長老、北大農学部教授の宮部金吾である。札幌農学校2期生の宮部は顕花植物はもとより菌類や海藻類の研究にも精力的に取り組んだ世界的な植物学者である。彼は植物分類の基礎は隠花植物にあるとの考えから、北大を隠花植物のメッカにしたいと願っていた。菌類の研究はすでに農学部で進められており、新設の理学部には藻類の研究拠点をつくりたいと考えていた。そして、宮部は当時の東大理学部植物学部の副手として海藻を研究していた山田に白羽の矢を立てたのである。

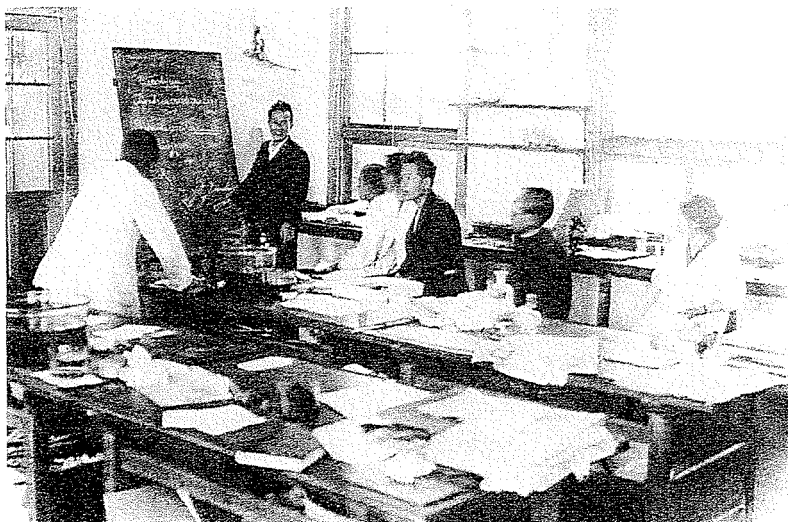
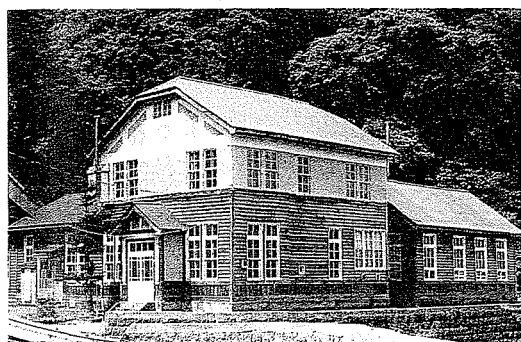
1927年8月のある日、東大理学部植物学教室を訪れた宮部は同教室所蔵の海藻標本を調べるために早田文蔵教授に依頼して山田に標本室を案内させ終日付き合わせた。主目的は海藻標本の観察というより山田の教授候補者としての適性の観察をしたと思われる。そのあたりの経緯について山田は自著の「わが海藻研究五十年」(文献6)に詳しく書いている。また、宮部の弟子の北



北大理学部開学の頃(1930年4月北大理学部植物学教室の温室で、左より山田、秋山、坂村)

忍路臨海実験所実験室で講義中の山田幸男(1931年)

東大の三崎臨海実験所について日本で2番目に古い臨海実験所として知られる忍路臨海実験所。今年(2007年)創立100周年を迎えた



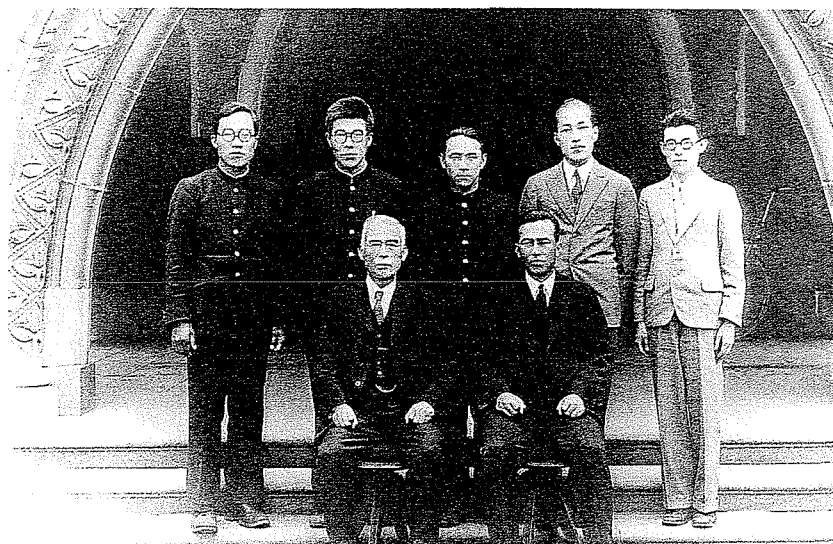
大水産学部の時田郁教授は、宮部先生が山田幸男を「あの青年は brilliant でねえ」と目を輝かせて人に言うのを聞いたと書いている(文献5)。

このようにして、北大理学部植物分類学教室は宮部らの期待を背負った山田幸男を迎えて日本の藻類学の拠点となるべくスタートした。因みに、助教の山田とともに創設期の教室を支えた助手は山田の東大時代の後輩で恩師早田文蔵教授の女婿でもある秋山茂雄であった。秋山はイネ科、スゲ属植物の分類に取り組み助教を経て金沢大学教授となった碩学である。また植物学第一講座(植物生理学)は農学部から移籍した坂村徹教授、第三講座(植物形態学)はエンレイソウ属植物の染色体研究で著名な松浦一教授が担当した。

海藻学の恩師、岡村金太郎との出会い

山田幸男は1900(明治33)年、京都に生まれた。幼い時に東京に移り、東京府立一中、一高、東大に学んだ。中学の頃より医学への道を志しドイツ語を学び、一高でも医科志望の三部に在籍していたが、医者への道が嫌いになって大学では理学部で植物学を学ぶことにした。山田の長男、山田真弓北大名誉教授(動物学)によれば動物の解剖が嫌になったことが原因らしいとのことである。3年次の卒業研究は台湾の植物研究で著名な早田文蔵教授の指導を仰ぐことに決めたが、与えられた研究テーマは予想に反して海藻の研究であった。この時の早田の話は次のようなことであった。現在の植物学研究は隠花植物の研究者が少なくなりその養成の必要があること、当教室で海藻学を専攻し業績をあげた北大の遠藤吉三郎博士が病没され、海藻学に関する豊富な文献と標本が当教室に寄贈されていて研究資料が沢山あること、日本の海藻学の先達で水産講習所(東京水産大学を経て現在、東京海洋大学)の岡村金太郎教授のご指導を受けることが可能であること、などである(文献6)。

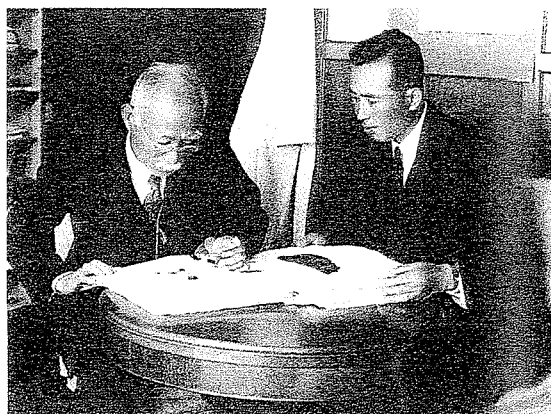
山田は早田教授の意向を受け海藻学を専攻することに決め、遠藤吉三郎の標本の整理に取り組み始めた。1922年の秋、江ノ島で岡村が指導した海藻の採集会で山田は初めて岡村に会った。後年、岡村が亡くなった時、「今度海藻を勉強する者が出てきた」と岡村が喜んでいたことを岡村夫人から初めて



岡村金太郎先生(左)と山田幸男(1933年
北大理学部の山田教授室で、「藻類 第25巻
増補 山田幸男先生追悼号、1977」より転載)

岡村金太郎先生をお迎えし北大理学部玄関にて、前列左より岡村先生、山田、後列左より田中剛、入野田泰夫、瀬川宗吉、秋山茂雄、稲垣眞一の各氏、1933年)

※筆者注記：後列の秋山先生以外は当時の学生たち。後年、田中は鹿児島大学教授、瀬川は九州大教授、稲垣は北海道教育大(旭川校)教授となり多くの研究業績をあげた



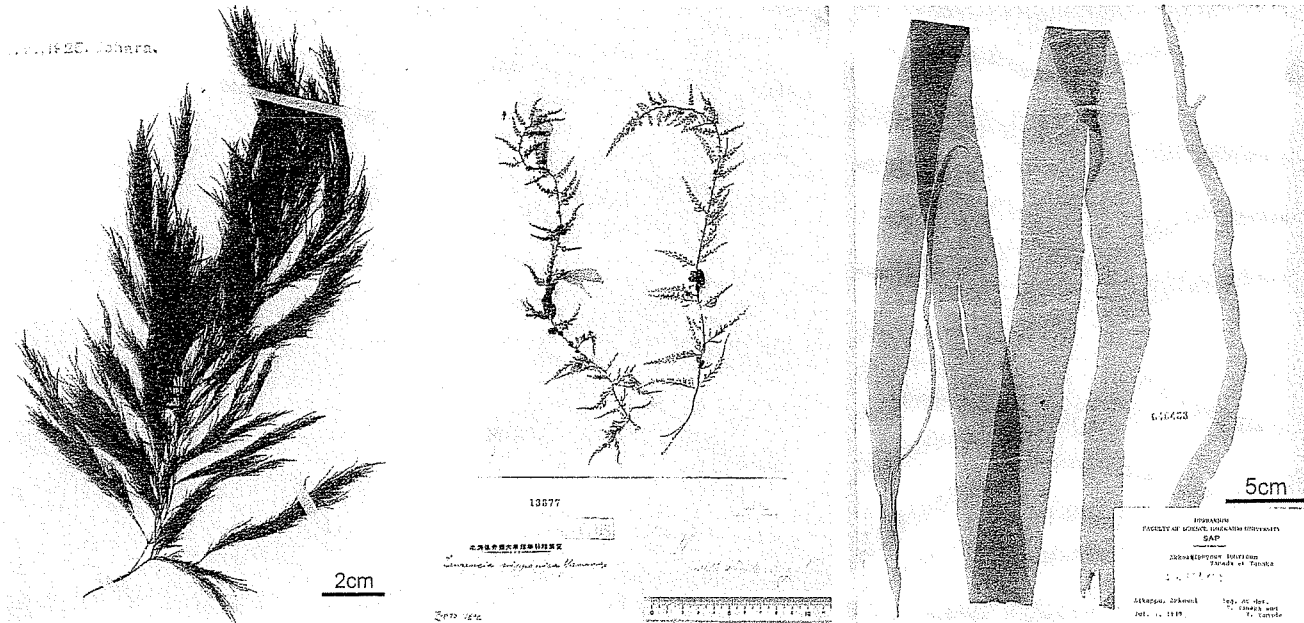
聞かされて山田は感動したという。岡村も山田に大いに期待していたのである。山田は遠藤標本を研究する傍ら北海道から沖縄に至る各地で精力的に海藻の採集を行い、それらの標本を精査した上で岡村の助言を仰いだ。山田は、これらの仕事をするに際し、遠藤博士の残された文献や標本が如何に貴重で有用であったかと述懐している。山田は直接的には岡村の、間接的には遠藤の教えを受けて育ったとも言えるだろう。

卒業論文は早田文蔵教授からの示唆で台湾の海藻を研究することとなった。この関係で山田の処女論文はドイツ語で書かれた「台湾産海藻に関する報告第一報 緑藻(植物学雑誌39巻 1925年)」である。前述のように山田は中学時代からドイツ語を学んでいた関係で英語よりドイツ語の方が堪能だった。1924年、大学を卒業し、副手として教室で藻類の研究を続けていたが、1925年にはサイパン、パラオなど南太平洋諸島の海藻調査をする機会に恵まれた。

セツチエル教授との出会い

同年12月、東京赤坂の近衛歩兵三連隊に一年志願兵として入隊。これは二十歳になった時に当時義務であった徴兵検査を受け甲種合格になり、大学卒業後はいざれ兵役に就かなければならなかったことによる。翌年東京で開催された汎太平洋学術会議に中隊長から特別許可を貰い軍服姿で出席し南洋産緑藻類の分布に関する研究報告を英語で行ったが、軍服姿での学会発表は話題となり新聞記事にもなった。この時の座長が海藻学の泰斗、米国・カリフォルニア大学のW・A・セツチエル教授で、論文交換を通じて互いに名前は知っていた。この学会の経験や外国人研究者との交流が後年の海外留学や研究推進に大いに役立つことになる。

1926年3月に志願兵としての任期を終え、再び研究生活に戻った。時代は変わり昭和に入った。東大で副手として研究に没頭する傍ら中学校(現在の都立新宿高校)で非常勤講師として博物学を講じた。5月には三崎の臨海実験所における岡村教授の海藻学実習の助手を務めたりして岡村と一緒に



山田幸男によって新種として発表された海藻は多い。ここには北大理学部所蔵のタイプ標本のうち3点を選び示した。
 左から、緑藻 オオシオグサ、紅藻 ウラソソ、褐藻 コンブモドキ
 (『北大自然史タイプコレクションー128年 知の伝承、21世紀COE「新・自然史科学創成」北海道大学総合博物館、2004年』より転載)

過ごす時間が多くなった。そして1927(昭和2)年8月、前述の宮部金吾による北大理学部教授への就任要請につながる。

海外留学

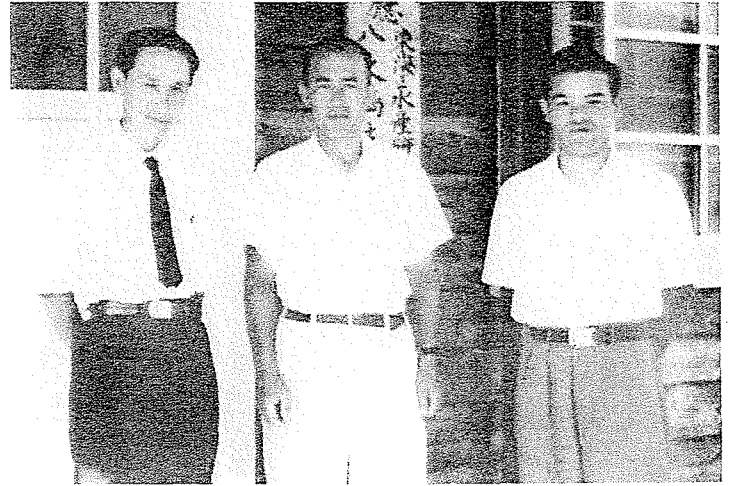
最初の留学先は前述のセツチエル教授の研究室であった。ここでは紅藻類のソゾ属の分類に取り組み、これが後に学位論文として結実した。山田を北大に連れてきた宮部はその昔ハーバード大学で学んだが、その時の同門の友人がセツチエル教授であった。セツチエル教授の下で研鑽を積むことを最も喜んだのが宮部であった。10カ月のカリフォルニア生活の後、アメリカ東部の植物園や大学での標本観察などを経て1929年にヨーロッパに渡り、フランス、オランダ、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、イギリス連邦、オーストリアの各国で標本調査と海藻学者たちとの交流の日々を過ごした。この時の標本調査から後に幾つかの論文が出され、あるいは学生たちへの研究テーマのヒントを得ている。さらに、最初に訪れたカリフォルニア大学でセツチエル教授から与えられた紅藻ソゾ属の研究をまとめて原稿を同教授に送った。この論文は1931年にカリフォルニア大学紀要に掲載されている。当時の移動に時間を要する交通事情などから考えても、海外で多忙な研究生を送りながらこの論文原稿を作成したことは並の努力では到底できないことであろう。我々弟子どもは山田の仕事の速さにもいつも驚嘆させられたが、これは若いときから身に付いていた彼の能力の一つであったと思われる。

ヨーロッパ滞在も終わりに近づいた頃、山田は最後に訪れたい所があった。それは革命後間もないソビエト連邦のレニングラード(現サンクトペテルブルグ)にある科学アカデミー附属植物研究所で、ここに保存されている北海産の海藻類の標本を観察することであった。ソ連領事館に滞在許可を申請したが長く待たされたあげく、結局許可は得られず、やむなく3月半ばにベルリンを発ち、モスクワ経由のシベリア鉄道で帰国した。この2年間の海外での研究生活は山田にとって終生忘れることのできない得難い経験であった。

山田にとって、海外留学中の大切なもつ一つの仕事は研究図書の見集であった。



最初の留学先アメリカ・カリフォルニア大学のセッチェル先生(1936年、2度目の渡米の時に)



八丈島で、左は瀬川宗吉氏、右は舟橋説往氏(1951年)

た。各地で購入した多数の専門書や論文別刷りなどを理学部宛に送り続けた。これらは今日に至るまで北大のみならず日本の海藻学研究にとって大切な財産となっている。

理学部開学と海藻研究所の設置

昭和5(1930)年4月、山田は帰国してすぐ札幌に赴任した。植物学教室全体の開学準備は第一講座(生理学)の坂村徹教授によって進められ、第二講座(分類学)はすでに着任していた秋山助手が準備を進めていた。しかし、必要図書をはじめ顕微鏡などの備品の調達、標本の充実など山のような仕事に山田を待っていた。それにほとんど連日午後は教授会などが開かれ学部運営上の諸問題を片づけた。創設期に苦楽を共にした秋山は、「山田先生はよく体がもつな、と思うほどお働きになった」と語っている。中学時代からの撃剣(山田は剣道のことをいつも撃剣と言っていた)で鍛えた体は小柄ながら実に頑健であり、親から健康な体を貰ったことをいつも感謝していたほどである。そして人一倍負けず嫌いであった。趣味の釣りでも野球でも負けず嫌いの逸話は沢山残っている(文献3)。その負けず嫌いの山田が教室の創設期に連日夜遅くまで働いたことは容易に想像できる。

標本類を充実させるために道内各地で秋山とともに採集を行ったが、その内容は海藻類にとどまらず陸上植物にも及んだ。学生時代に山野を歩き採集を積極的に行った経験が生きたことは言うまでもない。海藻類の採集で道内各地を歩いたが、当時の水産専門部の施設であった忍路臨海実験所や採集場所に恵まれた室蘭海岸には足繁く通った。忍路の臨海実験所はかつて遠藤吉三郎が教授として教育研究に活用した北部日本海唯一の施設であり山田が札幌に赴任してすぐ訪れた。室蘭は太平洋に面しているので潮の干満差が大きく海藻の採集や観察に適した岩盤が多いところである。これらの調査の中で忍路は緑藻のヒトエグサが豊富にあり、また室蘭は北方性のコンブ類が大量に生育していることから、これらの海藻の生活史を明らかにするために海藻類を培養できる技術と施設の必要性を痛感した。忍路は当時の水産専門部の施設

で常駐の研究者もおらず継続的な研究はできない環境にあった。山田の海藻研究を目的とする実験所設置の強い願いは赴任後3年を経て実った。それが1933年5月に開所した室蘭の北大理学部附属海藻研究所である。専ら海藻を研究対象とするこの施設は我が国は勿論のこと、世界でも初めてのものではなかった。理学部が出来てからわずか3年後にこのような施設が出来たことは特筆に値する。この設置の意義を理解し実現に努力した当時の田所哲太郎理学部長を山田は「研究所生みの親」として終生その恩義を忘れなかった。これは田所の若い山田に対する期待の大きさの表れでもあろう。

この研究所は当初の水産試験場室蘭支場だったところを改修し、常駐の研究者1名でスタートしたが、その後一度移転し、さらに1956年に現在地のチャラツナイ浜に新築移転した。教官ポストも教授を含め複数の体制となり、大学院生、留学生も研究に専念できるほどに充実した。この研究所から欧文・和文の研究報告が刊行され、海外の藻類学研究者からも注目される業績をあげ現在に至ることになる。特に藻類の培養技術と設備の充実により生活史や生理学的研究が山田の弟子たちによって進展した。海藻研究所はその後、理学部附属海藻研究施設、北方圏フィールド科学センター室蘭臨海実験所と名称を変更して現在に至っているが、山田が目指した海藻学研究の流れは脈々と続いている。

また、理学部の植物第二講座(植物分類学講座)は現在、自然科学部門・多様性生物学講座IIと名称が変わったが、研究内容は藻類の分類・系統が主であり日本の藻類学の拠点の一つであることに変わりはない。

前に述べたように、山田は台湾はじめ南方性の海藻研究からスタートしている。北海道に赴任して今度は北方性海藻に触れる機会が多くなった。特に道東はコンブ類の宝庫で、寒流域の海藻の研究には厚岸の臨海実験所が拠点となった。北大理学部附属厚岸臨海実験所は理学部創設に伴って設置された鉄筋コンクリート造りの立派な建物である。ここには動物学教室のスタッフが常駐している。植物の学生たちは毎夏、一週間ほど臨海実習のためここに滞在する。このようなことからこの地域の海藻のフロラも次第に蓄積されてきた。

山田は1933年夏に理学部の地質鉱物調査に同行してウルップ島に行く機

会があった。このようにして徐々に北方性海藻の知見を増やしていった。

1934年、山田の学生時代の恩師の一人早田文蔵が、翌1935年8月には海藻学の恩師岡村金太郎が相次いで逝去した。岡村は1931年に水産講習所名誉教授となって以前から書きためていた日本海藻誌の原稿執筆に専念したが出版目前で亡くなった。山田は岡村の意志を継ぎ、校正などを精力的に行い、翌1936年4月に内田老鶴圃から名著「日本海藻誌」が出版された。約970頁に及ぶ大作で、序文は宮部金吾によって書かれた。

教育、研究、そして社会貢献

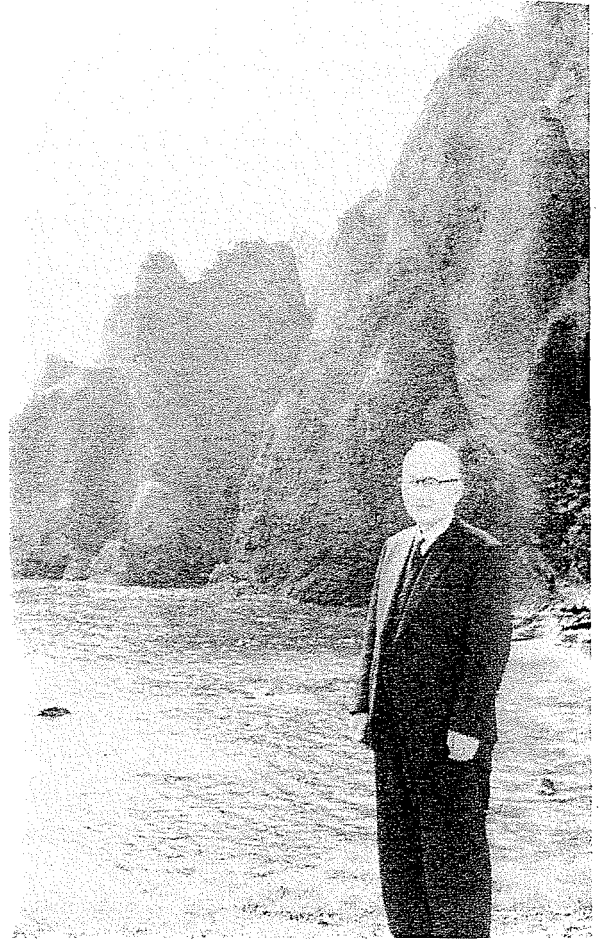
山田が残した論文は1924年から1973年までで145篇ある。研究対象は緑藻、褐藻、紅藻と幅広く多くの新知見を学界に報告した。山田による新属、新種等の新しく記載された分類群は200近くあり、新産種を含めるとさらに大きな数字になると思われる(黒木宗尚著「山田幸男先生の経歴と業績」(文献4))。

調査、採集で訪れた地域は千島から台湾、ミクロネシアに及ぶ。業績のうち、フロラ(その地域の植物の記載)的なものとして台湾、ミクロネシア、沖縄、八丈島、伊勢湾の菅島、陸奥湾、北海道の渡島小島、厚岸、知床半島、北千島、ウルップ島などがあり、モノグラフ的研究としては、紅藻のソゾ属、ガラガラモドキ属、コナハダ属、キリンサイ属、緑藻ではイワツタ属、サボテングサ属、褐藻では南方産のホンダワラ属、コンブ科植物などの研究も多い。このことから見ても、山田は文字通り日本を代表する海藻の分類学研究者であった。日本の海藻学は岡村金太郎、山田幸男の二人によってその基礎が作られたと言っても過言ではない。山田の薫陶を受けて育った海藻の研究者は北大のみならず他大学の出身者も少なくない。弟子たちは各地の大学でさらに弟子を育て、現在は山田からみれば孫弟子、曾孫弟子が活躍する時代となっている。分類学的手法も遺伝子レベルでの解析が不可欠になったが、それらの研究も形態による分類の基礎的知識があって成り立つことである。

1952年、日本藻類学会が設立され、山田は会長に就任した。その後、



現在の室蘭臨海実験所(海藻研)



室蘭海藻研究所前で(1969年4月)

1964(昭和39)年に北大を退官するまでの12年間を会長として、さらに、その後は名誉会長として会の発展に尽くした。学会の事務局は発足当初から山田が退官するまで北大理学部植物分類学教室内におかれ、雑誌「藻類」が年4回発行された。筆者は大学院、助手の時代にこの学会の幹事を務めたことがあるが、財政が窮乏した時は、会長が私財で一時補ったりしたものである。現在の日本藻類学会は会員数も増え研究発表の内容も多岐にわたり、設立当初からみれば格段に充実している。山田の蒔いたもう一つの種が立派に育ったのである。さらに、1964年から3年間は国際藻類学会の会長に就任して学会の発展に尽くした。

若い頃の山田は教室では厳しかったという話を筆者は先輩たちからよく聞かされた。しかし、山田は大声で叱ったり怒鳴るようなことは全くしなかった。率先垂範して研究に際しての姿勢を教えるタイプであった。一日に一度は学生の研究状況を見て学生の研究室を訪れた。その時にコツコツと廊下に響く山田の靴音に緊張したと先輩たちからよく聞かされた。筆者が学生の頃はすでに老教授の風貌で、出来の悪い我々にはやさしい先生であったが、対象物を徹底的に観察する姿勢は一貫し、いい加減な推論、予測などを嫌った。卒業研究をする時期になると山田はその学生を連れて必ず一度は採集旅行をした。朝から晩まで1対1の付き合いである。筆者は焼尻・天売両島に連れて行って頂いた。その時に採集した福藻コンブ科のアナメは少し後に新種テウリアナメとして発表された。一つの種を採集から新種として発表に至るまでの研究過程を勉強させて頂いたことは得難い経験であった。焼尻の宿では海藻の話だけでなく各地の美味しい食べ物の話などをしてくださった。懐かしい思い出である。

山田を偲ぶ話には食べ物がよく出てくる。旧植物分類学教室では昼食時になると山田を囲んで皆で食事をするのが恒例になっていた。学問的な話ばかりでなく政治をはじめあらゆる話がでてきたが、食べ物のこと(食感)に関しては山田の独特な表現が有名でひそかに記録されていた。

「山田幸男先生追悼文集」(文献3)の中に弟子の一人が書いた「無責任会議」という文の中にそれらが記載されている。例えば、シヨリ・シヨリはキク

ラゲ2マスカット3マイタケ4奈良漬け5ハナカタバミの地下茎、シコシコは1ボラの胃2マンボウの胃、というようなもので全部で28通りが記載されている。

正月には我々を「自宅に招いてくださり、奥様の手料理で新年会をするのが恒例であった。また食糧事情の悪い当時、貧乏な学生たちにとっては山田家のご馳走は格段の味であった。

山田の性格は真面目、誠実、地味で、派手なことや目立つことを嫌った。しかし、いわゆる「象牙の塔」にこもるだけの研究者ではなかった。特に、海藻学の成果が水産業の発展に役立つようにとの思いは強かった。コンブやノリの増養殖の問題はもとより、今でも問題になっている磯焼け(海底が石灰藻に覆われ、普通の海藻がなくなってしまう現象)の調査も行っている。このような海藻学の応用面について関心を持っていた山田にとって、願ってもない協力者がいた。1933年に余市の道立水産試験場に赴任してきた木下虎一郎博士であった。木下は水産講習所で岡村金太郎の薫陶を受けた篤学の士である。山田も木下も岡村から互いの存在を聞かされ、将来協力するようにと申し渡されていたので名前は互いに知っていた。山田は岡村を通じて今で言う産学連携の大切さを理解していたに違いない。戦時色が濃くなるにつれて軍からカリ・臭素の原料として海藻の増産が命じられ、道水産部、試験場、北大が協力して事に当たった。このようないことから、山田は木下を通じて道の水産部とのつながりが深くなった。戦後も浅海増殖関係の仕事のほか、内水面漁場管理委員会委員なども長く務めた。

このようなことに加え、研究者の就職難もあって、山田は優秀な卒業生を国の水産研究所や地方自治体の水産試験場に就職させた。それらの弟子たちの多くは恩師の期待に答え水産業の発展に少なからず貢献した(文献10)。

山田はまた北海道の文化財保護委員も長く務めた。それは阿寒湖のマリモが国の特別天然記念物の指定を受け、常にマリモの実態調査や枯死の被害調査などをする必要がある、山田にその仕事が課せられたからである。そのほか、北海道科学審議会委員、北海道増殖研究会会長なども務めた。学内にあっては評議員、理学部長の要職を歴任し、理学部、北大の発展に力を尽くされた。

1960(昭和35)年に北海道新聞文化賞、1964(昭和39)年に北海道文化賞を受賞、1972(昭和47)年には勳二等旭日重光章に叙勲された。

1975(昭和50)年7月6日、京都の自宅で病没、享年75歳。法名・智法院理学寿幸居士。菩提寺は京都東山の洞雲寺である。

この年の春、日本藻類学会では山田幸男先生喜寿記念号の出版を決めたが、山田の死去に伴い急遽追悼号に変更した。論文50篇(国外からの論文9篇を含む)が集まり1977年8月に出版された。

おわりに

山田幸男先生の薫陶を受けた優秀な先輩諸兄が健在であるにもかかわらず、筆者が非才を省みずこの小伝を書くことになった。本稿は末尾の文献を参考に作成したが、先生ご自身の回想録とも言うべき「わが海藻研究五十年」に依るところが多い。また写真教葉もこの書から転載させて頂いている。先生のご長男山田真弓先生(北大名誉教授・動物学)には本稿に目を通して頂き多くの貴重なご教示を賜った。心から御礼を申し上げる。標本写真は参考文献11(北大自然史タイプコレクション)から転載させて頂いたが、この件については北大の堀口健雄教授にお世話になった。室蘭臨海実験所(旧海藻研究所)の写真は同実験所の本村泰三教授に提供して頂いた。

1964(昭和39)年の2月、北大大学院在学中の筆者に、山田先生からその年の4月から分類学教室の助手にとの意向を伝えられ、先生ご自身は直後の3月末で停年退官された。先生が京都に居を移されるまで名誉教授として教室でお仕事をなさっておられたので続けて先生のお教えを受けることができた。血縁関係は無いが同じ山田姓であったために先生にご迷惑をおかけしたこともあるが、恩恵を受けることも多かった。

1974年9月に京都にお住まいの先生からお手紙を頂いた。レニングラードの植物学会大会のセカンド・サーキュラーをコピーしてお送りした時のご返事である。その中に、「・・・此前申し上げた通りレニングラードの古い標本は小生五十年來の念願のもので、何とかして参りたいとは思って



京都のご自宅の庭で(1973)
山田幸男先生追悼文集より転載

見藻暮日

昭和廿九年十月

山田幸男

山田幸男先生筆による色紙「見藻暮日」
山田幸男先生追悼文集(1976)より転載

ますが、只健康がゆるすかどうかたよりない次第です」とある。結局先生の願いは実現しなかった。先生が他界されてから3年後の1978年に、筆者は当時のソ連邦レニングラード・科学アカデミー・コマロフ植物研究所で3カ月近い研究生活を体験した。その時、先生がご存命であれば種々ご報告できたのにと何度か思った記憶がある。先生は達筆で筆まめであった。弟子に対しても実に丁寧なお手紙をお書きになった。今回、機会を与えられて懐かしい先生の筆跡や記憶を辿る時間を持つたことを感謝する次第である。

文献(年代順)

- 1 中村義輝 故山田幸男先生の御葬儀に参列して「藻類」23巻3号 1975
- 2 新崎盛敏 故山田幸男先生と日本藻類学会発足の頃「藻類」23巻4号 1975
- 3 山田幸男先生追悼文集 同上文集刊行会 1976
- 4 Muneno Kurugi (1976) : Yukio Yamada (1900 ~ 1975) Phycologia 15 (2) pp.215 ~ 219.
- 5 日本藻類学会誌「藻類」第25巻増補 山田幸男先生追悼号 1977
- 6 山田幸男「わが海藻研究五十年」1979
- 7 北海道大学理学部植物分類学教室五十年小史(1930 ~ 1980) 同上刊行会 1980
- 8 山田真司「山田幸男」の項 木原均・篠達喜人・磯野直秀監修「近代日本生物学者小伝」(1988)
- 9 Masakazu Tatewaki (1996) : Yukio Yamada (1900 ~ 1975) . Ed. D.J.Garbay & M.J.Wyne, . Prominent Phycologists of the 20th Century. Pubby Phycol.Soc.Amer., pp.131 ~ 138.
- 10 山田幸男先生生誕100周年記念寄稿集「藻類」第48巻第3号(2000)
- 11 北大自然史タイプコレクション1128年 知の伝承、21世紀COE「新・自然史料 学創成」北海道大学総合博物館 2004 (海藻標本写真三点を転載)
- 12 杉山滋郎「山田幸男」の項 北の科学者群像(理学モノグラフ1947 ~ 1950) 北海道大学図書刊行会(2005)

やまだ いえまき

1935年東京都生、1959年北大理学部卒、1962年同大学院修士修了、専攻は植物学(海藻学)、理学博士。1964年北大助手、講師などを経て1980年小樽商大教授、1992年小樽商大大学長、2002年3月同上任期満了退任、4月小樽商大名譽教授、6月北海道開拓記念館館長、2006年3月同上退職。現在、北海道ユネスコ連絡協議会会長、北海道NIE推進協議会会長など。